

第一次国共合作期におけるコミンテルン 軍事顧問の役割 (IX)

—— A.И. Черепанов : Записки Военного Советника
в Китае —— を中心として

滝 本 可 紀

On the Role of Military Advisers of Comintern in the Period of the First
Kuomintang and Chinese Communist Party Cooperation (IX)

Yoshinori TAKIMOTO

Abstract

Generals Yang Ximin and Liu Zhenhuan conferred with their British masters in Hong Kong as to how they organise the uprising best. Everyone who had tried to solve the conflict by peaceful means became certain of Yang Ximin and Liu Zhenhuan's treachery when the government intercepted Yang Ximin's secret correspondence with Duan Qirui, the leader of the northern warlords. It was necessary to crush the insurgent troops and strengthen the government's position. The strike force broke through the enemy's defenses. Generals Yang Ximin, Liu Zhenhuan and their staff officers fled to the territory of the Shamian, foreign concession or to foreign steamships. The troops, left without commanders, surrendered with no resistance.

The May 30 Movement aroused the whole country. The Kuomintang right, backed by the British imperialists, was preparing another counter-revolutionary coup d'etat. On 20 August 1925 the right began to act. At 10 a.m. near the building of the Kuomintang Central Executive Committee a hired killer murdered Liao Zhongkai, the real leader of the Kuomintang left and royal follower of Sun Yat-sen. After that there was confusion in the government.

An emergency meeting of Military Council right after the assassination elected a three-man leading body consisting of Wang Jingwei, Xu Chongzhi and Chiang Kai-shek. M.M. Borodin and V.P. Rogachov, a senior adviser who had replaced Blyukher after his departure to the Soviet Union, attended the meeting of this leading body. Regarding operations to disarm unreliable troops as a domestic affair, the government planned and carried out without the participation of the advisers. Now the main enemy, General Cheng Jiongming's force remained and the Second Eastern Campaign against him began.

1925年の初頭より始まった第一次東征が一応の終結を見る間に、広州で新たな反乱が起こった。唐繼堯将軍が広州に進出し、それを楊希閔、劉震寰将軍が迎え入れ、広東省で支配権を獲得しようとするものであった。この動きは北京政府の段祺瑞と結託したものであった。4月27日、廖仲愷、許崇智、蔣介石は汕頭で会議をもち、翌日、広州に軍を戻し、反乱を鎮圧することを決定した。5月21日、東征軍は陸續と潮州、梅

県方面から出発し、海豊、平山、淡水を通り、6月6日広九鉄路の樟木頭一帯に到達した。

一方、楊希閔等は6月4日、省長公署、粵軍総司令部、財政庁、公安局および市内の重要な機関を占領した。6月7日から8日にかけて河南のセメント工場にある革命政府を攻撃しようとしたが、黄埔軍校の砲兵隊と革命海軍によって撃退された。

東征軍は6月8日石龍に到り、9日石灘へ10日には廣州市の東の郊外に到達した。

西江方面では、李濟深の軍が広州——三水鉄路に

沿って東進し、北江方面では、譚延闓、朱培徳、程潜將軍の軍隊が粵漢鐵路に沿って南下した。広州の珠江の南岸に居た李福林の軍も広州へ向かった。

粵漢、広九、広三鐵路の労働者もストライキを行い、機関車を使用できない状態にさせ、楊希閔等の軍隊の移動を妨げた。

6月10日、総攻撃が始まり、6月14日には政府軍は広州を回復し、反乱軍に対して完全な勝利を得た。

この間に上海では《5・30》運動が始まっており、香港、広州地区にも波及して来た。

香港の大ストライキが6月19日に始まった。6月23日、デモ隊が広州外国人居留地沙面の西側を歩いて、彼等に向かって銃火が浴びせられた。

この事件の後、ストライキは更に拡大し、それは広東政府の支援を受けた。これを積極的に行った中心人物は廖仲愷であった。そのため、外国の帝国主義者および革命がこれ以上拡大することを欲しない国民党右派の人々にとって、彼は最も危険な人物となった。

1925年8月20日、彼は国民党中央執行委員会会場の門前で暗殺された。黄埔軍校の校長として党軍の実質的幹部を握っていた蔣介石はこの事件を利用して、孫文なき後の党代理代表の胡漢民や総司令の許崇智を追放し、自分の意に添わない軍を武装解除し、軍事上の実権を握った。

楊希閔等の反乱、香港の大ストライキ、廖仲愷の暗殺が起こっている間に、広東省東部地区では陳炯明軍がまたもや勢力を盛り返し、香港の英当局と手を結び、広州に進撃して国民政府の打倒を企図した。これに対し国民政府は陳炯明を徹底的に撃破し、広東省を完全な革命の根拠地とするために第二次東征を始めた。

以下はこの作戦の軍事顧問 А.И. Черепанов の回想録〈Записки Военного Советника в Китае〉1976, НАУКА の中の 249 頁～288 頁の全訳である。

闘争のスローガン

雲南および広東の軍閥達の反乱を粉碎する準備をしている間に、中国共産党、国民党、国民革命軍の政治部員は大規模な政治キャンペーンを行った。彼らは民衆に対して、誰が自分達の友であり、誰が敵であるかを説明し、革命勢力に対する大衆の支持を確保した。

第1段階として、《雲南軍閥・唐繼堯將軍が始めると脅している内戦から広東を救え》というスローガンの下でキャンペーンが行われた。広東の東部、すなわち

東江地区から軍閥はすでに追放されているけれども、全省にわたって平和と幸福な暮らしを築くためには、更に約1年が必要であろう、とアジテーター達は言っていた。

コミュニスト達は反乱が鎮圧された後に大衆の3つの要求が満足されるであろう、と言明した：地方自治を確立すること、より公正な方法で税金を査定しなおすこと、秩序の維持と匪賊から人々を守るに必要なレベルまで軍隊を縮小すること。

次の文は当時出された公示の一つである。

《国民党はその創始者孫文の三民主義を実現する用意がある。人民なしの国民党は無である。一方、人民も国民党なしには広東から略奪と貧困を無くすことはできない。党と人民が一体となって努力してこそ、広東省は幸福な状態になるであろう。我々は東江地区で軍閥達を鎮圧した時すぐにこの課題の実現に着手することが可能だったかも知れない。しかし今や、敵は再び広東に侵入し、民衆から略奪しようとしている。唐繼堯は広東を自分の支配地——第二の雲南に変えようとしている。彼は内戦によって広東の住民に被害を与えようとしている。我々はこの内戦を許すことができようか。否、できない。我が省に侵入しつつある連中に対して我々は抵抗しなければならない。そして全力を尽くし、勇気を持って戦わねばならない。

内戦反対、侵略者は去れ！

広東の団結と平和万歳！

政治キャンペーンの具体的計画の第1段階には、次の諸点が含まれていた。

1. 第二次全中国労働組合会議執行委員会の名において、軍閥唐繼堯に反対する宣言文を出すこと。
2. ビラやポスターの印刷をただちに仕上げ、配布すること。
3. 国民党中央執行委員会は党会議を開き、党員にキャンペーンの本質的意義を説明すること。
4. 軍隊内でただちに大衆活動を始めること。そのために若い兵士達の会議を召集すること。指揮官全員に宣伝の任務と方法を知らせること。
5. 国民党中央執行委員を会議と集会に派遣すること。
6. 宣伝委員を梧州、韶関、惠州その他の重要な都市や地区に派遣すること。
7. 警察の指導者の支持を確保するために、彼らの会議をただちに召集すること。
8. 広州の労働者によるゼネストの準備を始めるこ

と。

秘密を考慮して、反乱者達に対する闘争の活動計画の第2段階は具体的には作成されなかった。後で次のようなスローガンを出すことだけが決定された：《中国の民族 — 革命解放運動の裏切者を打倒せよ！》、《軍閥を打倒せよ！》

新聞記者の会議も召集して彼らの支持を確保することが予定された。

5月17日、若い兵士達の同盟の代表者会議が成立した。そこに国民党中央執行委員会の代表者が出席した。兵士、労働者、農民、民族ブルジョアジーの大規模なデモを行う決議が採択された。

国民党中央執行委員会全体会議は5月19日、農民組合を圧迫している県長達を更迭するよう政府に要請した。

農民の間で政治活動することは特に困難であった。この重要な活動で主要な役割を果たしたのはコミunist達であった。そして彼らは大衆の支持を獲得することができた。彼らの宣伝活動は反乱者達を粉砕した時だけでなく、第二次東征に際してもまた政府軍を助けた。

広東における農民運動の組織化にとって決定的な意義を持っていたのは農村にコミunistの宣伝委員が常住していたことであった。

1925年春、省の94県のうち22県に農民組合が設立され、21万人が団結した。その主な者は土地のない小作人と小農であった。国民党中央執行委員会農民部には、農民組合の嵐のような成長を指導する力がないことが間もなく明らかになった。広東の農民組織第一回大会を5月1日に開き、そこで省全体の農民組合を設立することが決議された。

多くの村で集会が開かれ、農民達は地区会議に出席するための代表者を選出した。各地区会議は代表を一人ずつ区会議に送った。区会議は代表を選んで省大会へ送った。代表は各区で12人以内であった。

広州で行われた農民組合の省大会で、農民達の要求は次のようにまとめられた。

1. 納期前の税の徴収を禁ずる。
2. 小作料の上限を決める。
3. 高利貸の禁止。
4. 民団維持のための税金の徴収を禁止する。
5. 農民自衛団の組織がえ。
6. 土地を貧農に提供すること。
7. 農民組合を攻撃している役人達や郷紳を厳しく

罰すること。

8. 農民をポーターとして強制的に動員するのを禁ずること。

9. 農民が村の自治に参加するのを保障すること。

大会宣言の中で帝国主義、軍国主義、貪欲な役人、人民のあらゆる敵に対して一貫した闘いを行うことの必要性が述べられた。

大会において農民組合の統一組織が承認され、広東の農民組合省委員会委員が選出された。この大会は巨大な政治的デモンストレーションとなり、また省全体の農民組織を統一する第一歩となった。それは広東におけるその後の出来事のなりゆきに大きな影響を与えた。

代表者は各々の村へ帰り、その地で農民組合を強化し、新しい組合を設立し、《広東を内戦から救え》のスローガンのもとに政治キャンペーンを行った。このスローガンは広汎な人民大衆に理解された。

広東省の東部において、農民の中での活動は軍閥陳炯明の軍隊から解放された地区の政治的強化と並行して行われた。

状況は容易なものではなかった。農民組合の組織化はうまくいかなかった。政府軍が反乱軍と戦うために広州に去った時、事情は特に複雑になった。このことは陳炯明の、身を隠していた支持者達を少し元気づけ、林虎將軍や洪兆麟將軍に復讐の気持ちを起こさせた。

少し前までは広州政府軍を歓迎していた住民の間に、今や不満が増大しつつあった。1925年3月26日にВ.А. Степановに宛てたВ.К. Блюхерの手紙から、すでに第一次東征の間でさえもБлюхерが許崇智に対して、直ちに各地区の政治的強化に着手するよう、根気強く勧めたことを我々は知った。そのために県長の職務を最近できた革命委員会に渡すよう彼は提案した。許崇智は色々の口実をつくって、県と市の自治組織の選挙を行うのを避け、相変わらず、自分の取り巻きの中から県長を指名した。彼はまた、政治部を設けて広州軍のすべての隊に政治委員の制度を導入する提案を拒否した。

許崇智は口先だけでは、孫文が有名な遺言の中で示した方針に断固従うことを国民党の指導部に確約した。許崇智は《特別の必要性無しに国民党の分裂を認めるべきではない》と声明した。

最初のうち、解放された地区の住民は新しい行政と陳炯明時代にあった古い行政との間に違いがあるとは思わなかった。負けた側が居た時の状態も勝った側が

それに代わってからの状態も相変わらず同じようであった。黄埔軍校の部隊を除くと、去って行った兵士もやって来た兵士もその行動には大差が無かった。前者は税を絞り取ったが、後者も現れるとすぐ同じことをやった。戦闘中、広州軍は(または黄埔軍校部隊を除いて)置き去りにされているものはどんなものでも見逃さなかった。

このような状況下において、住民は將軍達の際限のない《金巻きあげ所》に忍従した。農民達は定められた期限に、我慢強く税を持って来たけれども、將軍達が期限前に税を要求した時は激しく抵抗した。実際、彼らは武器の脅威の下で、翌年あるいは数年先の税金さえも支払うよう命令された。軍閥は交代しても、税金は昔決められたままで、勝利者もそれを変えることは困難であった。もし、前にいた將軍が当年分の税金をすでに徴収することができた場合、再度取り立てることも困難であった。住民は抵抗し、そのような要求に対して一部しか認めなかった。しかも、それは強い圧力をかけられた場合であった。

陳炯明派の將軍達は住み慣れた場所を立ち去らねばならないことが予想された際、農民達から1925年分の税金を前もって絞り取ろうと、あらゆる手段を用いた。農民の方は彼らが立ち去ることを知っていたので、支払いを急がなかった。もちろん、暴力と血まみれな衝突なしではすまなかった。

ある地域を占拠すると広州軍の將軍達は許崇智の暗黙の同意の下に、自分の部下の中から県長を指名し、ただちに税金の取り立てに着手した。彼らは特に急いだ。何故なら、自分達が占拠した地域が他の者、特に蒋介石將軍に奪われるのではないかと恐れた。更に彼らが恐れたものは、政府軍の大部分が広州に向け出発すると、林虎や洪兆麟が反撃に転ずるかも知れない、ということであった。農民から強請に対する苦情が絶えず司令部に持ち込まれた。また時には、略奪のことを訴えられたこともあった。住民の不満が募っていた。火に油を注いだのは、陳炯明の同盟者が住民に対し、君達は以前はある《合法的》な秩序に馴染んでいたが、今や無秩序な支配者の下にある、と言ったことであった。

許崇智は広州に移動しなければならないと思っていたが、しばらくは静観していた。住民の支持が自分に集まると思われた政策を組織化する代わりに、第三者を介して撃破した將軍達と上海で交渉を始めた。彼はこのようなやり方で、軍事的に極めて弱体化した省の東部に対して陳炯明が反撃してくるのを阻止できる、

と無邪気にも期待した。

潮州の美しい一角に、洪兆麟將軍の家が湖を見下ろすようにそびえていた。ここから、とても美しい遠くの山々の光景が開けていた。江西省出身のこの將軍が書いた種々の銘文のある掛軸が壁のあちこちに掛けていた。その一つはとても印象的であった。《私の昔の故郷にはこのような湖も山もない……》許崇智の空談で洪兆麟を騙せようと考え、また洪が戻れることが可能になってもすぐさま自分のかつての地位を復活させることはないであろうと考えることなど、いずれにしても馬鹿げたことであった。

国民党左派の政治委員、第一次省農民大会代表者、特にコミュニストは許崇智を無視して、当地区の政治強化のための方策をとった。

東方グループ政治部付顧問 Шнейдер が送った報告から、5月の終わりに10の県——潮州、汕頭、澄海、潮陽、揭陽、普寧、惠来、Tainu、Haoning と豊順——の国民党組織には4,950人、農民組合には17,000人の組合員がいたことが明らかになった。更に、汕頭に河船海員組合(500名)と理髪師組合(300名)が組織された。最も人数の多い農民組合は普寧と惠来、Tainu にあり、それぞれ4,000人、潮州と汕頭は2,000人ずつであった。

顧問は次のように書いてきた。《この農民大衆はすべて名目上の組合員であるが、この人々の間で活動は全く行われていない。この地域全体に6人のコミュニストと16人の社会主義青年団のメンバーがいるだけである。戦力はどうみても不十分であった。彼らを直ちに支援する必要がある。さもないと、成功裏に進められた組織化の活動は政治的に強化されないであろう。》

汕尾県には約5,000人の農民組合員がいた。また5つの労働組合があり、総勢500人であった。県長はコミュニストで、軍と住民との関係はうまくいっていた。

特に組織化がよく成された農民組合は広州と汕頭の途中にある海豊で活動していた。ここで指導的役割を果たしたのは彭湃をリーダーとするコミュニスト達であった。この地区の活動条件はコミュニスト達にとって都合が悪いように思えた。国民党員1,000人のうち700人は右派であった：それにも拘らず9人のコミュニストと9人の社会主義青年団員が約300人の左派国民党員を、自分達の周りに結集することができた。

海豊には農民部隊が創設され、150丁のライフルと20丁の自動拳銃をもって武装されたこの武装農民部隊に対して、陳炯明軍が戻って来た場合には山へ去っ

てゲリラ戦を始めるように指令された。コミunist達はこの部隊の指揮官を養成するために軍の学校を組織した。この学校の教員は黄埔軍校の13人の生徒であり、その中にはコミunistが含まれていた。農民自身のアジテーターを養成するための第2の学校も創設された。ここで学んだのは36人で、その中に6人の若い女性がいた。

この県のコミunist達は自分達の政治活動を行うに際し、3つの要求を提出した。

- 1) 全農民組合員に負担能力以上の税金を免除すること。
- 2) 小作料の軽減。
- 3) 自衛のための農民部隊に武器を提供すること。

《当地の全権力はコミunistの指導する農民達にある。——5月30日、政治部顧問が海豊から報告してきた。——彼らは大規模で興味ある活動を行っている。確かに、宣伝力においては欠けたところも感じられるが、その組織は団結力とそれが発揮した強固さにおいて驚くべきものがあることを認めざるを得ない。その組織は強力で健全である。》

私は第一次東征の時期に、この評価が正しいことを自分の目で確かめる機会を持った。我が軍が1925年2月27日、海豊に進出した際に熱烈な歓迎を受け、到る所で赤旗が翻り、《革命万歳》の叫び声が聞かれた。

陸豊県の事情は当時、更に悪かった。この地は海豊に次ぐ華南における第2のゲリラ闘争の基地になることになっていた。ここでは150人が国民党組織に入っており、その中のわずか3人だけがコミunistであった。農民組合には約1万2千人が結集していた。

陸豊における状態の責任はすべて第2師団長張民達將軍が任命した県長にあった。彼はすぐに地主や商人の熱烈な擁護者になり、彼らの支持を得た。陳炯明の以前の将校達で、自分の大小の部隊を引きつれて広州軍側に移って来ていた者も彼を扇動した。汕尾、海豊、特に陸豊の各県には陳炯明將軍の支持者の秘密組織が存在していた。

地主や商人、陳炯明の一味の集団はテロを行い、可能な限り農民組合を解体した。かくてXing tian村では農民達に組合を解散するのを強制した。農民組合県委員会委員達は海豊にじっとしており、ごく稀にしか陸豊へ出かけなかった。それ故、間もなく農民運動講習所から5人のコミunistが陸豊へ送られて来た。

これ以外の、林虎や洪兆麟の攻撃の脅威が存在する地区でも、農民組合の活動が展開された。五華とLuz-

ing 県で、農民組合はそれぞれ2,000人ずつの組合員を結集した。五華の方には国民党員が500人に上っていた。興寧県の農民組合員はわずか300人であったが、国民党員は500人であった。梅県と河口では農民組合が創られ始めたばかりであったが、梅県では強力な国民党組織が活動していた。

訓練を受けた政治活動家幹部が不足していたこと、また国民党中央執行委員会農民部の指導が弱体であったことから、これらの地区の大衆工作は十分に発展しなかった。

東江流域では1925年5月初め頃までに全体で、約4万4千人の農民組合員、約6千人の労働組合員、8千人の国民党員、そして中国共産党および社会主義青年団員合わせてわずか50名が存在していた。

これらの数字は反乱軍と戦うために主力軍が広州へ去った当時、これらの地区を政治的に強化する活動の状況を表している。

広州軍第4師団第1、第6旅団、呉鉄城旅団が東方グループに加わった後、これらの部隊の中にも政治部の影響が現れてきた。第1旅団長陳銘枢將軍、第4師団長許済將軍が顧問と政治委員を自分達のところへ送ってくれるよう要請してきた。実のところ、この要請に応ずることは不可能であった。政治委員は黄埔軍校第1、第2連隊にしかいなかった。一方蔣介石將軍は彼らが移って行くことには同意しなかった。

広州軍各部隊は広州へ進撃する途上、住民とのトラブルが比較的少なくなり、軍紀は著しく向上した。中国の將軍達の持っていた戦闘部隊は同盟者という立場から、次第に国民革命軍の有機の一部に変わり始めた。

しかし無論、国民革命軍の基盤そのものである黄埔軍校第1、第2連隊でさえも、万事がスムーズに運んだわけではなかった。敵はここにも分裂を持ち込もうとしていた。例えば黄埔軍校第1連隊政治委員繆斌は自分の部隊にいわゆる《孫文主義学会》の支部を組織した。これは孫文の教義の持つ革命的性格を歪曲し、民族統一戦線に公然と反対するものであった。繆斌と闘争したのはコミunistで、第1連隊第2大隊政治委員の李之龍であった。そこで蔣介石はただちに彼を実戦部隊から、教官として黄埔軍校に戻した。このような事態の進展に勢いづいて、繆斌は第2連隊にも孫文主義学会の支部を組織しようと試みた。しかし、当連隊の政治委員の適切な反撃を受けた。

それでも活発な政治活動は何も結果を生まなかったわけではなかった。住民達は次第に状況を理解し始

め、東方グループの兵士達に対して友好的な態度を示すようになった。

その間、この国に大きな政治的事件が起こりつつあった。それによって政府軍の作戦が非常に容易になった。

1925年5月30日、上海の労働者、学生は日本の工場でコミunistの労働者が殺害されたことに抗議するデモを組織した。外国租界の警官がデモに銃火を浴びせた。このような悲劇的な事件は全国に渡って革命的高揚を呼び起こした。いわゆる《5・30運動》が始まった。どの町にも反帝国主義のデモ、政治集会、連帯ストの強力な波が広がった。

5月30日の事件は広州の状況を灼熱させた。進歩勢力は雲南、広西の軍閥の陰謀に対し、公然と反対行動に出た。住民の労働者層が国民革命軍の側に立った。

迫りつつある嵐

5月17日、広州政府は一部は町の西にある河南へ、一部は黄埔島へ移った。

楊希閔將軍と劉震寰將軍は香港で自分達の英国の主人達と、反乱をいかにうまく組織するかについて協議した。彼らは孫科(孫文の息子)の名前を利用した。噂によると、彼は2人を支持し、間もなく広州へ来るはずになっていた。

劉震寰の司令部を守るために、広西軍のうち約1,000人の兵士だけがその町に残された。主力は粵漢鐵路に沿って、広州に近いいくつかの駅に配置された。雲南軍は河南の広州側の対岸にバリケードと砂袋の壁を築き始めた。彼らは次のようなスローガンを掲げた：《広東をコミunistから救え》。新聞、特に香港のものには広州政府に対する中傷文が掲載された。

不安になった商人達は自分の商品を沙面や香港の租界に次第に運び出し始めた。

国民党中央執行委員会の内部は全く混乱していた。汪精衛と胡漢民は適切な決意を示さなかった。この間、国民党左派が組織した政治集会が市中で持たれ、そこで軍閥唐繼堯や彼の同盟者達と闘おうという呼びかけが鳴り響いた。

反乱者の側にも統一がなかった。広西軍第5師団長Liu Shuwen 將軍は公然と劉震寰と絶縁し、政府軍の参謀長に任命された。第4雲南師団長はずっと政府に忠実であった朱培徳將軍の方に移ると言明した。

5月20日、司令部は故意に偽の《陽動作戦的》指令

を出した：北方および東方グループの司令官は唐繼堯軍の攻撃から西江を守るために、広州を越えて広西省への移動を開始すること。この指令の中で、雲南軍に対して次の任務が課せられた：第3軍は惠州に留まり、北方からの攻撃に対して東方グループを援護し、他のグループは広州の秩序を維持すること。広西軍はずっと以前から政府の信任を失っていたが、この指令の中では故意に言及せずにおかれた。

他日、作戦計画に従って、政府軍に対して新たな、今度は真の指令が出された。

市中に存在していた政府軍の少部隊は5月22日に河南へ移動した。この時より、広州は反乱軍の完全な支配下にあった。

5月20日、広西軍は第1雲南師団とともに湖南軍に向かって北へ進撃を開始した。

第3雲南軍団は東方グループ軍の行動を監視するために、1個連隊を淡水——平山間の道路のある地区に移動させた。この時、胡漢民は第3雲南軍団の司令官と会談を持ち、彼を政府側に引き寄せようと望んだ。

ついに、楊希閔將軍は東方グループの軍が広州に向けて進撃するのを一時中止するよう、政府に公式に要求した。楊希閔將軍の司令部に毎日いた巡洋艦《中山号》の司令官は相変わらず不審な態度をとった。現況では装甲列車を利用することが不可能だったので、司令部の命令で武装を取り除いた。粵漢鐵路の移動可能な車輛は韶関に移動した。范石生將軍の部隊が唐繼堯に向かって進撃に移ったという情報が届いた。

5月25日、劉震寰將軍が香港から帰って来た。自分の軍隊の高級将校達の会議で彼は次のように言明した。政府が自分に敵対的である限り、5月26日あるいは27日に政府に反対して立ち上がらざるを得ないであろう。

1日前に広州に戻った楊希閔將軍は5月26日に譚延闓將軍と会合し、現状の紛争の調停者になってくれるよう彼に頼んだ。翌日の5月27日、楊希閔は警察長官である吳鉄城將軍の所へ出向き、秩序回復のため広州へ戻ってくれるよう頼んだ。この時、総司令官は市中で税金を徴収する権限を警察当局に即時返還するよう劉震寰將軍に指令を自分が出した、と話した。

劉震寰將軍は口先では、胡漢民を自分と一緒にさせないという条件で、政府と和解することに同意した。同日の夜、楊希閔と劉震寰両將軍は胡漢民と会合し《和解》の条件を審議した。

広州政府は楊希閔と劉震寰の両將軍に忠誠心を公に

するよう要求した。若干の政府委員、特に胡漢民は反乱軍の將軍達が和解に応ずる用意があると確認したことまごつき、すでにとられていた決定的な手段が正当であるかどうか疑いをいだいた。これらの動揺は軍の中にも現れた。朱培徳將軍は北方グループに留まっていた。これと同じ理由から、西方グループの司令官は交渉の結果を待っており、広州の周囲に軍を集結させるのを遅らせていた。

5月30日、事態が急変した。平和的手段でこの紛争を調整しようとしていた人々はすべて、楊希閔と劉震寰の裏切りを最終的に確信した：政府は楊希閔が軍閥の首領、段祺瑞と交わしていた秘密の往復書簡を押さえた。

反乱軍を鎮圧し、政府の立場を強化する必要があった。共産党広東委員会は徹底的に原則的立場に立っていたので、最終的な決定を下す際に勝れた役割を果たし得た。

雲南軍第3軍団長が胡漢民に、自分の軍隊は東江地区を去り唐繼堯に対抗するため前線に赴くと知らせてきた。

広州は公然と戦いに備えていた。商人や将校の家族達は香港、マカオの外国人租界へ汽船で移住した。6月1日、学校は疎開した。沙面の租界地区に防御施設がつくられた。

6月4日、政府の一部が黄埔校生徒の警備の下に、河南へ移動した。同じ日、韶関の湖南軍が第1雲南師団第1連隊を武装解除した。この事件から軍事行動が公然と始まった。

政治的、軍事的観点から見ると、この時こそ反革命に対する行動を起こす絶好の時であった。広州の労働者、農民組織、さらに民族ブルジョアジーも政府との連帯を表明し、また政府を全面的に支援する用意のあることを言明した。反乱者に対して断固たる手段をとれ、という要求があらゆる所に広がった。広州政府がこうした支援を得たことは恐らく、今までに一度もなかったであろう。

広西においては、5月下旬、范石生將軍が南寧付近で唐繼堯に強力な打撃を加えることに成功した。東部においては、林虎將軍が静観的な立場をとり、さしあたり省の北西部へ前進する計画を拒否していた。

雲南軍と広西軍の司令部間に意見の不一致があったため、反乱者達は好機を逸し、政府軍が分散している事実をうまく利用することができなかった。東方グループ軍が接近して来る前に北方グループを撃破する

ためには第3雲南軍団を広州へ移動させる必要があったが、そのことに手間どった。彼らの間で同意が成立した時は、時すでに遅い状況だった。東方グループが第3雲南軍団の陣地に非常に接近したので、もはや雲南軍は東方グループより早く広州へ近づくことができなくなった。楊希閔、劉震寰の両將軍は第3軍団のないう状態では北方グループに対して作戦を始める決断はできなかった。彼らはまたもや自分たちが政府と和解する用意があることを長々と喋ったが、それはこうすることによって時間を稼ぎ、東方グループが広州に接近するのを阻止するためであった。

反乱者たちに軍の再編成を行わせないために、司令部は3月30日付、指令No.6で、6月7日迄に次の諸地区に集結するよう、軍に命令を出した。

1. 湖南軍——Ning wanglo へ。その後、北から鉄道線路に沿って広州へ進撃すること。

2. 朱培徳部隊——Chen cheng へ。その後、湖南軍と共同作戦をとること。

3. 西方グループ——三水地区へ。その後、三水—広州鉄道に沿って西から広州へ進撃し、それから北上すること。

4. 東方グループ——6月8日迄に石竜—順徳地区へ進出すること。

5. 南方グループ——李福林將軍の部隊は河南を守り、西方グループを支援するために、また広州に打撃を加えるために、移動できる準備をしておくこと；黄埔島を防御している部隊は第3雲南軍団が石竜—順徳地区で東方グループに対して抵抗してきた場合に備えて、その後方に移動できるよう準備を整えておくこと。また李福林將軍の部隊と協力して広州占拠の準備をすること。そして東方グループに対して敵が抵抗を示した場合、その側面と後方に打撃を与えることができるように珠江を強行渡河する用意をしておくこと。

この指令は各グループの軍によって正確に実行された。

共産党および中国社会主义青年団は広汎な労働者、農民大衆を組織して革命政府を支援した。コミュニストの指導の下で、東方グループの軍にとって良好な政治状況が確保された。廖仲愷は西方グループ軍に対しても広州住民に対しても、精力的に政治教育を展開した。

政府は軍の作戦指導をB.K. Блюхерに全面的に委ねた。通信に信頼がおけないことを考慮に入れて、彼は

種々の状況下においてどのように行動すべきかに関して伝える際、大抵の場合、顧問たち宛に指令付きの書簡を自分で書いたり口述筆記させた。

これらの指令は通常、即座に中国語に翻訳されて司令官に知らされた。愚図愚図しておられないことがしばしばあったが、翻訳者の数は十分でなかった。そういう場合、書類は部隊付の顧問の所へロシア語のまま転送され、それから彼ら自身が中国側の指揮官に指令を伝えた。

例えば東方グループ付の顧問 В.А. Степанов に宛てた 5 月 28 日付の書簡の中で次のことが述べられている。

《5 月 24 日付の貴官の手紙を 27 日に受け取った。先の手紙で 23 日、第 3 雲南軍団から 1 個連隊 (6 丁の機関銃と 600 丁の銃) が引き出されたことを、すでに私 (В.К. Блюхер) は知らせておいた。今日情報部から届いた報告によると、第 3 軍団の一部である 1 個大隊が楊坤如旅団長指揮の下に順徳に到着した。我が軍の集結地点への移動は指令通り行われた。唯一の例外は朱培徳將軍のグループが 1, 2 日遅れるかも知れない、ということのみである。私の考えでは、司令部の指令はたとえ期限通りに実行されなくても、遅れは 1 日を越えないであろう。》

現実もそのようになった：決戦は予定された 6 月 11 日ではなく 12 日に起こった。

さらに В.К. Блюхер は許崇智將軍とはかかわりなく楊坤如と交渉に入るよう、グループの指導部に勧めた。

《雲南軍の内部にこれらの部隊を惠州および君のグループの少し北へ移動したい気持ちがある、と報告の中に述べられている。彼らは楊坤如の軍隊が貴官たちに合流するのを恐れている。旅団長陳銘樞は分別のある指揮官で、自分の旅団をうまく切り回していた。第 4 師団は許済の管理が劣悪であるため、貴官のグループの全般的な成功に影響を与えざるを得ないような大きなミスを何度か犯す可能性がある。それ故、その師団を必ずコントロールし、直接指導しなければならない。……

たとえ——В.К. Блюхер は書いている——戦闘が平山付近で急に激しくなったとしても、白芒花から敵に側面攻撃を加えることができる。これらの事を考慮に入れると、残っている Hetung の旅団はそれだけでは何もできないであろうし、またおそらく何もしないで無駄に時を過ごすことになるだろう、という理由から左縦隊を弱めることは得策ではな

いであろう。計画中の通信網を М.И. Дратвин がこの手紙に同封している。

司令部の政治局は明日か 5 月 30 日に仕事にかかる。多分、その後に政治キャンペーンの推進に関する指令が届くであろう。現在のは出発前に貴官に与えられた計画に従って自分の任務を果たすように。……

В.К. Блюхер は更に次のように知らせてきた。劉震寰將軍は 5 月 25 日、自分の軍の高級将校たちの会議で、5 月 26 日か 27 日に政府に対し公然と攻撃に移ると言明した。今や彼は沈黙し、自分の司令部を粵漢鉄路の Chung tai 駅へ移した。公然たる攻撃の噂が聞こえなくなっている。敵の軍の中に大きな狼狽が感じられ、以前にあった勇敢さは劣えてしまった。翌日、楊希閔は政府に対して自己の忠誠心を保証し、そして紛争の平和的解決に努力している。昨日、《平和会議》の数の上では 2 度目の会議で、彼は劉震寰が目下の所唐繼堯將軍に対する戦いの必要性を認めるだろう、と言明した。汪精衛が唐繼堯に反対する声明を出す提案したのに対し、楊希閔は次のように答えた。劉震寰はこれを実行するであろうが、今すぐにこの事を彼に要求すべきではない。楊希閔は自分の出した次の 2 つの提案に対し、何とか同意を得ることができた：劉震寰が広東省の南西部へ移動するのを許可すること。また雲南軍は朱培徳將軍の軍と広州軍第一師団に加え、自分の戦力の一部をも広西に派遣することに同意するので、東方グループの動きを一時停止すること。ただし、現状では軍隊を東江地区から移動させる必要はない。

胡漢民は相変わらず、ずるく立ち回っている。彼は次のように答えた。許崇智將軍の同意なしに第 1 の問題を解決することは難しい。何故なら、広西軍が移動することは彼の利益を傷つけるからである。

第 2 の点に関しては、東方グループの移動は自然現象のようなものである：軍は東江地区で自己の任務を果たした後、広西軍から広州を守るためにそこへ戻って来る権利がある。そして結局、唐繼堯を攻撃する任務が軍に与えられた。したがって、東方グループの行動を一時停止することに同意できない。

我々の指導部の中にも、問題を平和的に解決しようとする傾向を持つ人が 2, 3 あった。しかし、大部分の人は相変わらず、戦いの道と反乱軍の武装解除を唯一の正しいことと考えている。我々はすでに決定されている計画を変更しようとするあらゆる試みと、断固闘うであろう。……》指令書からの引用文は В.К. Блюхер が顧問達に政治状況を知らせる際、將軍達を通してで

はなく自分の口から伝えたいという彼の意図を示している。將軍達は故意に情報を歪める可能性があった。そうすることによって、彼らは蒋介石の場合と同じように、時折個人の利益を追求する提案の裏付けをしようとした。

В.К. Блюхерは同じ手紙の中で В.А. Степанов に書いている。《電報の一つで、蒋介石は来たるべき衝突において自分のグループが決定的な存在であるとは思っていない、また彼の意見では、主要な役割を果たすに違いないのは湖南軍、黄埔軍校、李福林將軍の部隊である、と言ってきた。我々は今回の作戦にとって有害となる蒋介石の気持ちと闘わねばならない、そして彼のグループこそこの名誉ある、決定的な役割を果たすのであって、他の残りの軍はすべて彼の成功を支援するにすぎないことを彼に銘記させなければならない。》

この問題に対する蒋介石の態度は現在実行している作戦計画の挫折に、致命的な役割を果たすかも知れない。我々にはできるだけしばしば、雲南軍と広西軍を排除すべきだという考えに戻らなければならない。今や、政治的軍事的状況によって、この目標を達成することが容易になっている。しかし、将来はこのような事態は2度と起こらないであろう。結局、雲南側の言う平和の意図は時期を稼ぐための全くの策略で、将来、彼らが攻撃して来ることはいずれにしても避け難いことである。》

В.К. Блюхерの指導のスタイルを例証するために、1925年5月30日付の、朱培德將軍の顧問である Ф. Мацейлик に宛てた Блюхер の手紙をもう一つ引用しよう。

《この手紙に同封して多量の郵便物を君に送ります。その中には、指令書に加えて東方グループおよび軍司令官達宛の手紙も入っている。指令書や送付される手紙は現在起こりつつあることに関して十分な情報を君に提供するであろう。……

指令を正確に実行することを目指し、あくまでも実行を堅持し、説得しなさい。……朱培德將軍の軍隊の兵員数に関する君の情報は過大であり、私にいくつかの疑念を起こさせる。極めて正確なデータを入手するよう努めなさい。……

ストライキを実行するために、鉄道3線のすべてにストライキ委員会が設けられた。車輛は我が軍の方へ運ばれつつある。粵漢鐵路では、ほとんどの車輛が韶関に運ばれ、3台の蒸気機関車のみ広東との連絡のために残された。しかし、それは何時でも使いものにな

らなくなる可能性があった。機関車のある種の装置を労働者達が家に持ち帰った。広九鐵路では、車輛の移動はそれほどうまくいっていない。現在までほとんど実行されていない。これは必要な資金が無いせいだ。粵漢鐵路の車輛はすべて徐々に韶関に移動させ、広九鐵路では平湖の南に移動させ、そこに必要な燃料基地を建設することを私は提案した。移動させることのできないものはすべて、ストライキ参加者が可動できない状態にさせる。ストライキは反乱軍が出動するとすぐか、あるいは我々が指令を出した時に始められることになっている。……

農民組合は公然行動に利用してはならない、というのはそれは組合を大いに弱めることになるだろう。そして、弱くなった状態では将来、地主達との戦いを成功させることができないであろう。こういう理由で、彼らを大事にとっておき、ただ連絡と偵察のために、また敵の後方と通信の攪乱にのみ利用すべきである。後者の場合には勿論、農民組合は武器を捕獲できるいかなる機会も見逃してはならない。》

В.К. Блюхерは素晴らしい司令官であつたばかりでなく、現在の視座からも未来の視座からも状況を判断する思慮深い政治家であつた。中国のコミニスト達が広州や鉄道や水上運輸の労働者の間に創ったストライキ委員会を、彼はうまく利用した。そして農民組合の方は温存した。

同じ手紙の中で В.К. Блюхер は Мацейлик に政治キャンペーンの展開を急がねばならない、と注意を促している。そして更に続けている。

《……湖南軍は断固、かつためらうことなく計画を実行すると言明している。今や、この事を朱培德將軍に確信させることが必要である。妥協的な傾向を強めることを決して彼に許してはならない。政治的観点および敵を一掃した後政府に開ける大きな展望だけでなく、この計画を実行することは將軍自身にも有利であることを立証しなさい。》

孫文の印刷された紙幣のかかなりの量が譚延闓と朱培德に支給された。これらの紙幣は正貨によって保証されていなかった。それ故、銀行の破産を引き起こさないために、敵との衝突が起こるまで2人はそれを使用しないように要請された。このように要請されたにも拘らず、彼らはこの紙幣を使用した。銀行は今や、紙幣を正貨に交換することを求める人々に囲まれている。しかし、そこにはわずかな銀と外貨が貯えてあるだけである。もし、紙幣の発行が続けられるなら、銀

行は破産するであろう。将軍達にはこのことをほのめかす程度に留めておき、はっきり言うてはならない。紙幣は手元に留めておき、衝突がはっきりした時点ではじめて使用するように、朱培徳を説得しなさい。最初の一発で、我々は銀行を閉鎖する予定である。そうすれば、銀行は破産を免れるであろう。》

勿論、Блюхерの指示を実行し、必要な決定を採択させることに成功することは必ずしもすべての顧問にとって容易だったわけではなかった。時には、司令官が非実際的で専門知識に欠けた、状況に適合しない決定を持ち出し、顧問がその不適切さを証明し、正しい路線を実行するよう主張し通すには、多大な苦勞を要した。蒋介石付の顧問 В.А. Степанов の場合は、従来通り特に困難であった。例えば、蒋介石は6月7日、一日の休養のため樟木頭——塘頭厦——Cheling 地区に集結していた東方グループ軍に対して、今後、3個縦隊に分かれるよう提案した。主力は石竜——石灘から、顧問が勧めた鉄道に沿った道ではなく、もっと東側で橋を迂回し、北岸に渡った後良好な道路に出、増城を通過して広州に前進する。

В.А. Степанов は軍が分散することに強く反対した。そのうえ、我々の主力の後方に現れるかも知れない第3雲南軍に関して、全く情報が入手できていなかったもので、なおさら反対した。東方グループ軍は東からも西、つまり広州からも雲南軍の攻撃に晒されることになるかも知れない。Степанов は執拗に主張し続けた。《最短距離の鉄道に沿って、できるだけ速く広州へ到着する必要がある。そこで大会戦が起ころうとしている。我々の軍を疲れない状態で、苦しい行軍にならないようにそこへ導いて行かなければならない。Степанов は長い時間をかけて蒋介石を説得しようと努力したけれども、無駄に終わった。蒋介石は顧問に対する信頼について問題を提起しようとさえした。しかしこの時、特殊任務を持って惠州と博羅を訪れていた将校が到着し、次のような報告をした。それによると、第5、第6雲南師団の司令部は博羅に所在し、そこに軍団全体の主力がある。今や、蒋介石の計画は東方グループ軍にとって破滅的であることが明らかになった。この報告があったので、蒋介石将軍は顧問の提案を受け入れざるを得なかった。

この《司令官》の強情さの例をもう一つ挙げよう。6月9日遅く、東方グループ軍の司令官達は第3雲南軍が増城から広州へ向かいつつある、という情報を入手した。その日の夜、長い討議をした後、顧問が提案し

た作戦が採択された：6月10日、第4師団は敵の第3軍が撤退した道を前進した。そして、それを追撃しながら6月10日、増城から西25kmのPoxi地区に、11日にはLiuchung地区に到着する予定であった。黄埔軍校連隊および呉鉄城旅団は10日、ChangtuとTa-cheng地区に、第1、第6旅団はWucheng地区に進撃する予定であった。鉄道に沿って広州へ進撃する予定であった第6旅団を除く全部隊が6月11日を期して、敵の強化された地区の中で最も脆弱な地点と、敵が退却する可能性のある東北に向かう道路に集結することになっていた。

蒋介石は石灘を退却した敵が自分の軍の後方を攻撃する可能性があるかのように思い、後方を弱めることを恐れた。それ故、彼はまず増城を占拠し、それから敵を追って進撃することを提案した。結局、この将軍は顧問の意見に同意したけれども、やはり無断で、虎門から到着した1個大隊によって強化された1個連隊の外に、更に第4師団の予備旅団を残した。

蒋介石は陳炯明に対する作戦で、1923年末雲南軍が得た勝利のことを思い出した。当時、雲南軍は順徳に向かう途中、鉄道線路で敵に大きな打撃を加え、撃破した。この記憶があったので、蒋介石は6月11日付けの作戦の全般的な計画に前日は同意していたにもかかわらず、突然その実行を拒絶し、その代わりに第6旅団を強化することを提案した。その結果、攻撃グループの戦力が低下するのは避けられないことだった。

長い討議の末、В.А. Степанov は計画を変更するという蒋介石の気持ちを変え、予定された攻撃を実行することができた。

連絡網が無いために、非常に困難な仕事が通信関係の顧問 Михаил Иванович Дратвин の受け持ちになった。手紙や指令書の性格、実際の状況に応じて、彼は砲艦、飛行機、無線、電報、電話を利用して報告や指令を送った。後の3つが最も信頼できるように思われるかも知れないが、それらを利用するような状況はめったになかった。まして、そのネットワークはすべて広州を通過しており、その広州は反乱軍が支配していたので、一層それらを用いるのは難しかった。指令や報告を送ることが技術的に不可能と思われた場合は、敵に占拠されている地区を通過して連絡を確保しなければならなかった。この点で助けとなったのは農民組合の働き手であった。彼らはある村から他の村へと、農民組合の他のメンバーに一種のバトンのように、我々の書類を次々と手渡していった。いくつかの困難はあったけれ

ども、すべての情報は通常時間通りに届いた。例えば、В.А. Степанов が5月24日に送った報告は5月27日にВ.К. Блюхер が受け取っており、また5月30日付のБлюхер の指令書 No. 6 をВ.А. Степанов は平山で6月3日20時に受け取っている。これによって、必要な命令を時機を得て軍に与えることができた。

連絡と偵察に大いに助けとなったのは我々の操縦士 Василий Сергеев, Александр Кравцов, Христо Паков と航空士 Оскар Базенау, Джон Тальберг であった。彼らは良い地図を持たず、わずか1つの飛行場しか無い状態であったにもかかわらず、信じ難いほどの勇敢さを持って多くの任務を成し遂げた。もし当時、我々にソ連邦英雄の称号があったとしたら、それはきっと彼らに与えられたであろう。

反乱軍の撃滅

ついに、南方グループが出撃する番が回ってきた。6月1日、В.К. Блюхер は私を自分の所に呼んで状況を知らせ、次のように述べた：

—— 広州 —— これは敵が坐っている椅子である。貴官の任務は黄埔軍校生徒隊の助けを得て、敵の下から椅子を引き抜くことである。この目的のために、上陸部隊、より正確に言うと突撃グループが選び出され、その中には黄埔軍校隊も含まれている。この突撃グループは6月10日に河南に集結し、6月11日の朝、珠江を強行渡河し、市を占拠することになっている。

作戦の最終段階で、黄埔軍校隊は河を強行渡河し、広州の南の要塞地帯を占拠している雲南軍の側面と後方に出なければならぬことは、私には前から大まかに分かっていた。私は砲術顧問 Гилев, 技術関係顧問 Василийев, 海軍関係顧問 Смирнов-Светловский と一緒に、市の郊外にある東山の南に強行渡河するための地点を選んだ。これは渡河の後の戦いを容易にさせた。我々は敵の側面および後方に上陸し、掩護部隊を残し、東山を占拠し、広州に直接攻撃を加えることができるであろう。東山と広州の間にはあまり大きくない荒地があり、その場所ならば顧問団長が提案した場所よりも、広州攻撃のための戦闘隊形をより整然と組織することができるであろう。更に、東山側から珠江に沿って、何本かのヨーロッパ風の街路が町を通っており、それが軍の前進を容易にさせた。

私は自分の考えを В.К. Блюхер に述べた。彼の確固たる性格からみて、また作戦を立てる際いつも綿密に

考慮することからみて、最初に決めた突撃グループに対する任務を変更することは彼にとって容易ではなかった。Блюхер は執拗に私に考えを変えさせようとしたけれども、私は新たな論拠を考えられる限り挙げた。ついに彼は決心を変えた。このことは我々のチーフが柔軟性に富み、機転がきく人物であることを、またもや実証している。В.К. Блюхер は Суворов の法則 —— 現場にいると一層よく分かる —— を決して忘れていなかった。

6月10日、В.К. Блюхер は В.А. Степанов に次のように知らせた：《上陸グループは獵德村地区で渡河し、そこから Xing beng 村の方向へ攻撃を展開し、更に北の Xing hoi 駅に向かい、状況に応じて塹壕に立てこもっている敵の後方から市のいずれかに攻撃を展開する。貴官が雲南軍の抵抗線に近付き戦闘を始めた時、軍は渡河を始める。》

広州政府軍は市に雪崩れこんだ。

反乱撃滅の前の6月10日、В.К. Блюхер は次のように書いている：《敵は包囲され、我々の勝利は100%保証されている。一層大胆に行動するように、そして敵を逃走させないように監視所を設けるよう、司令官に要求するように。》

全般的な計画が入念に作成された後では、軍は毎日の指令を必要としなかった。2、3日ごとに軍に入ってくる指令だけで十分であった。しかし、広州攻撃が展開されている地区においては、我々は毎日どころか毎時の指令を必要とした。しかし、通信設備の点でこれは不可能だった。無線局は近くに無く、電信電話による通信は切られていて使用できなかった。攻撃の最終段階では、飛行機は燃料が切れて飛ぶことができなかった。西方グループには、総司令部が出した指令が実行されているかどうかを監視するはずの顧問がいなかった。この事もまた悪く利いてきた。

結局、西方グループは石田塘に掩護部隊を置き、予定の位置よりもかなり北の流溪河を勝手に渡河した。そして、広州攻撃のために朱培徳に予定されていた、粵漢鉄路地区の陣地を確保した。その結果、北方グループ軍は自己の戦闘隊形を東へ移さざるを得なかった。そして、6月11日に決定的な攻撃をする代りに、ほんの少し敵の先遣部隊を押し返したただけであった。

このために、また蒋介石の優柔不断のために —— 彼は第3雲南軍の退却をして行く部隊から一撃を加えられるのを恐れて、黄埔軍校連隊および呉鉄城旅団の前進を抑えた —— 広州強襲は6月12日まで延期せざる

を得なかった。

蒋介石をパニックにさせていた第3雲南軍の一部が武装解除された。

南方グループはWang Pinghu将軍の指揮下において、そこには顧問としてРогачевが働いており、6月10日の夜渡河地点に集結した。

我々の南方グループは2つに分かれていた。

第1部隊：黄埔軍校8個中隊、全兵員960名；顧問Геннадий Гилев指揮下の、古い《有坂》式無反動砲2台から成る砲兵中隊。砲兵を除いて部隊は1,420名であった。部隊を指揮したのは黄埔軍校の校長代理胡謙将軍で、私はその顧問に任命された。ほとんどすべての生徒が国民党员であり、そのうち115名がコミュニストであった。

第2部隊：モーゼル銃を装備した呉鉄城将軍の500名、および2台の大砲を持つ李福林将軍の1,000名。

かつての孫文の親衛隊(210名)と湖南学校(湘軍講武堂)部隊(250名)がまとめられ、顧問Шалфеевの指揮の下に独立補助部隊となった。

南方グループは総計2,880名であった。Wang Pinghu将軍はこのグループの中に自分の軍隊を持っていなかった。それ故、彼は胡将軍の前では何となく影が薄く、作戦指導も彼の手に移ってしまった。Шалфеевの部隊以外のグループ全体が無事に渡河を遂行するに十分な量の舢板と曳船を持っていた。

計画によると、渡河は次のような順序で行われることになっていた。最初に呉鉄城部隊が渡河して対岸を占拠する。その掩護の下で黄埔軍校生徒が上陸し、石牌村を占領し、状況によっては更に前進する：要塞地域の防御線を構えている敵の後方を攻撃するか、あるいは市郊外の東山に向け攻撃を行い、更に市へ前進する。Шалфеевの部隊は東方から黄埔軍校部隊を支援する。李福林部隊は洗村を占拠する。湖南学校部隊は黄埔軍校の予備軍に当てられた。

呉鉄城のモーゼル銃隊が第1梯団で渡河を始めた。この部隊が名誉ある任務についたのは主として、それが呉鉄城自身の親衛隊、つまり選り抜きの兵士達から成り、軽火器——モーゼル銃——で武装していたからであった。しかし、我々が彼らを過大評価していたことがすぐさま明らかになった。

呉鉄城部隊は銃火を浴びて、急いで強行渡河する代わりにこの《選り抜きの兵士達》は巡洋艦《中山号》の陰に隠れてしまった。そして、状況から判断すると、彼らには課せられた任務を遂行する意志が無かった。

そこで私は胡将軍と一緒に、本来やるべきであったと思われることをやった：二人は黄埔軍校生徒隊の舢板に乗って、激しい銃火にもかかわらず獵德村の上陸地点に向かった。

岸辺に近付くと生徒隊は舢板から飛び出し、胸まで水に浸って《やっつけろ》と叫びながらかまわず岸に向かった。それから止まることなく、彼らは獵德村に向かってすばやく前進し、そこを占拠した。

残りの生徒を乗せた舢板が次々と近付いて来た。彼らもまた急いで岸に降りた。彼らの強襲に感銘を受けてモーゼル銃隊も少し元気づいた。

両者が協力して石牌を占拠した。そして、部隊はその北東にある重要な哨所をすぐに占拠した。敵はパニック状態に陥って鉄道線路に沿って逃走した。一部は広州へ、一部は沙河へ向かった。

我々は東方グループの左側面の部隊と連絡をとるため湖南学校部隊を東へ向けた。また李福林の部隊は洗村へ向かい、Шалфеевの部隊は予備に残した。黄埔軍校の生徒隊は敵をすぐ後から追撃しながら、占拠した高地から東山に向けて、更に広州に向けて攻撃を始めた。

12時30分、私は次のような報告書を送った：

《同志 Степанов、東山は廖仲愷の家も近くにあるが、相変わらず敵に封鎖されている。

12時、黄埔軍校の生徒隊と呉鉄城部隊は市に入り、敵を掃蕩中である。私は君に敵軍が市中に集結していることを知らせる。北方グループの事については情報がない。湖南学校部隊とШалфеев部隊を東山に進ませている。李福林軍の一部はBodi村に残しておいた。他の部隊は東山に留まらず、我々を追って市へ向かった。詳しい報告は爺さん(В.К. Блюхер——自註)の所にある。》

市を占拠した後、黄埔学校、湖南学校の生徒隊は警備隊を組織した。市の北部にいたШалфеевの部隊は逃走中の敵を攻撃し、古い要塞の門の所にある高地を占拠した。上陸——突撃部隊の急速な作戦行動が敵の防御を粉碎した。楊希閔、劉震寰両将軍および彼らの幕僚達の一部は沙面の外国人居留地へ、一部は外国汽船へ逃れた。指揮を失って捨てられた軍は戦いを交えず降参した。

広州の住民が政府の力とその軍隊を信じていたのは明白な事実であった。黄埔軍校の生徒隊が現れるや市民達は家から出て歓迎し、商人達は店を開いた。

15時、政府は自分達が河南から市へ戻って来たこと

を市民に知らせた。

蒋介石は広州衛戍総司令に任命された。その部隊の要員は黄埔軍校の生徒であった。6月15日、政府は守備隊を除く全軍に市から出るよう命令を下した。

戦利品の量を確定することは困難であった。将軍達の誰もがその一部を隠そうと努めた。それは後で政府に武器を要請する際、大きな説得力を持ち得るためであった。

推計上、全体で約1万7千の捕虜がおり、そのうち500名が将校であった。戦利品：ライフル銃約16,600丁、機関銃120丁、大砲20門、そして范石生将軍艦隊の装備と乗組員付き6隻。

広州の将軍達や将校達は雲南軍が壊滅した後、広東省で支配者となり自分達の物質的情況を改善することを狙っていたことも、考慮に入れなければならない。

勝利を導くうえで再び決定的な役割を果たしたのは黄埔中央軍事政治学校連隊と生徒達であった。

事実上、反乱軍の粉碎を指導したのは赤軍の、極めて天分豊かな司令官の一人であるВасилий Константинович Блюхерであり、我々の顧問達は軍の中にあって全力を傾け、大きな手腕を発揮し、最後までプロレタリア国際主義の義務を果たした。

廖仲愷の暗殺

《5・30運動》は全国を揺り動かした。共産党は民衆に向かって次のようなアピールを出した：

《中国の労働者、農民諸君！ 抑圧された全中国の人民、立ち上がれ！ 残酷で凄まじい帝国主義を粉碎するために立ち上がれ！ 反帝国主義統一戦線万歳！ 中国民族解放万歳！》

いたる所で抗議運動が展開され、ストライキが起り、次のようなスローガンの下でデモが組織された：《打倒帝国主義》《不平等条約を廃棄せよ》《中国から外国軍を追放せよ》《同胞の死と苦痛に対し報復せよ》

上海のストライキ参加者を支持し、帝国主義に反対し、不平等条約の破棄や民族の解放のために戦うよう、広東の人民大衆に向かって共産党が呼びかけたのに答えて、6月21日香港で労働者のストライキが始まった。2日後、沙面の英仏居留地で帝国主義者達が反撃することを決定した。

6月23日、広州で7万人のデモが行われた。デモの参加者が沙面島と市とを分けている運河の岸に沿って行進していた時、機関銃や小銃の銃火に曝され、また

巡洋艦から大砲で砲撃された。《文明化した》ギャンギどもは52人を殺し、200人以上を負傷させた。凶暴な虐殺も結局のところ、革命運動の規模を拡大させたにすぎなかった：広州と香港の労働者のストライキは7月1日までに政治的ゼネストに変わった。大衆の反英ボイコットが始まった。

英国帝国主義に反対する香港—広州のストライキは1926年10月10日まで、16カ月間続いた。これは世界の労働運動史上、最も長く続いたものの一つであった。国民党の内部で左派が結束した。

広州政府内の左派は統一管理という方法によって軍を再編成し、財政を管理下におき、課税体系を整理し、広東を軍閥から解放し、北伐を準備することを目標とした。

中国の南部でコミュニストは国民党左派勢力と緊密に協力し合った。革命事業に対する彼らの献身、彼らが民衆の間で得ていた威信は広州の革命の勝利に大いに貢献した。

この時までには、広州政府や国民党上層部の中にブルジョア政治家や軍閥出身の右派から成る反対派が形成された。彼らは革命の波が高まったことに肝をつぶしたためである。彼らの指導者は湖漢民で、後に軍務大臣許崇智、警衛軍司令官呉鉄城が彼らに同調した。

国民党右派は英帝国主義の支持を得て、またもや反革命クーデターを準備した。

許崇智将軍は自分が軍務大臣であり、広州軍司令官である地位を利用して、立脚地を探り、クーデターのための兵力を集めた。

当時、蒋介石は軍事委員会の仕事には積極的にかかわっていなかった。彼は黄埔島に退き、軍校の戦力を強化し、必要な時、自分自身の目的のためにそれを利用したいと思っていた。

1925年8月20日、右派は活発な行動を開始した。午前10時、国民党中央執行委員会の建物の近くで、廖仲愷は殺し屋の犠牲になった。彼は国民党左派の真の指導者であり、また孫文の忠実な信奉者であった。

廖仲愷は国民党中央執行委員、財政部長、中執農民部長で、一時は広東省長でもあった。彼は政府で高い地位を占めていたにもかかわらず、決して民衆から遊離せず、コミュニスト達と誠実に実り豊かに協力した。そして労働者や農民はしばしば革命政府の事務所へ来て、直接彼にいろいろな問題を持ち込んだ。彼らは廖仲愷を自分達と違う人とは思わず、彼に自分の生活のことを率直に語った。廖仲愷は中山、東江、その他広

東省の色々な地方へ度々出かけ、農民達に講演し、農民組合や戦闘隊や自衛団を組織するのを援助した。

1924年初頭、前に述べたように、農民運動の幹部を養成するための講習所が広州に特に創設された。廖仲愷は講習所の指導を全面的にコミunistに任せた。

廖仲愷は労働運動に大きな意義を認め、労働者の読み書きの能力を向上させるための学校を設立することに、大きな注意を払った。このような状況下では、公的な教育制度よりも労働者の基礎教育レベルを高める方がより大きな意義がある、と彼は思っていた。彼は労働者を愛し、絶えず彼らに関心を払った。

正直で良心的な人間である廖仲愷は財政部長であったけれども、質素でつましい生活を送った。国の主人は人民であり、政府の資金は人民の必要のために支出されるべきである、と彼は考えていた。廖仲愷は自分の省の職員に《役人は金を愛してはならない、さもないと人民は貧しくなり、政府は衰える》と教えた。当時、広東の財政は未だ集中的に行われておらず、種々の軍閥達が勝手に取り立てる税金や賄賂が多数存在していた。これらの戦士達は全て腐敗状態に陥っていたので、人民の金を厚かましく自分達のものにした。一方、国民革命軍が必要とするものに対しては資金が十分にはなかった。

廖仲愷の強い要請に応じて、当時電報による回状が回された。その中で財政制度を統一する問題が提起された。この回状の中で廖仲愷は次のことを要求した。軍の人数の正確な登録制を導入し、1人の兵士にライフル銃1丁の原則で武器の数によって兵士の人数を計算し、この原則に従って給与を支給すること；すべての種類の税金およびすべての軍事支出を財政当局の統一的管轄の下に移すこと；役人は清廉であり、自分のために一銭たりともごまかしてはならない。》

財政が統一されると、軍閥から札束を奪うことになったであろう。それ故、廖仲愷は特に彼らに憎まれた。

廖仲愷の未亡人、何香凝は私に次のように語った：《1925年7月初旬、右派国民党員が胡漢民の家で会議を持った。そこには20人以上が出席したが、その中には鄒魯、鄧澤如、呉鉄城、林直勉、胡毅生、林拯民がいた。この会議で特に議論されたのは廖仲愷の活動に關してであった。》

右派の陰謀は先ず第1にコミunistおよび廖仲愷に向けられた。自己の目論見を実現するために、彼らは国民党の個人指導という古い制度を支持し、集团的

機関——中央執行委員会の強化に反対した。当時、党と政府の指導の重荷は主として廖仲愷の肩にかかっていた。右派が特に彼を烈しく憎んだのは当然であった。

陰謀家達は同一のメンバーで更に11回、会議を持った。

右派国民党員はあらゆる手段で革命の事業に妨害を加えてきた。そして自分達のクラブのようなもの《文華》を経営した。彼らは勝手気ままな演説をし、廖仲愷と彼の政治路線を罵った。特に狂気のように振る舞ったのは胡毅生と趙公壁であった。

右派の猛烈な攻撃にもかかわらず、廖仲愷は少しも動揺せず、自分が正しいと思ったことのために闘い続けた。

この事は香港—広州ストライキが始まった1925年6月21日以降、特に明らかになった。ストライキ参加者は中国共産党の指導と国民党農民部の支持を待って、ストライキ委員会を創りピケを張った。この農民部はストライキ参加者への援助資金を創ると共に、ストライキを継続させるための扇動—教育の仕事に大きな注意を払った。

当時、廖仲愷は文字通り寢食を忘れていた。彼は毎日、朝早く家を出て夜遅くなってやっと帰宅した。当時、右派国民党も《組合活動》に従事しており、中でもGu Zhang qinが最も活動していた。しかし、その方針は多少異なっていた：彼らは内部から労働運動を破壊するための行動を取り始めた。Gu Zhang qinと彼の協力者によって創られた右寄りの労働組合組織はゼネストに参加せず、後にはそれと闘う側になった。

8月14日、廖仲愷はストライキ委員会で各界の代表者を前にして次のような演説をした。

《ストライキは経済的なものではなく政治的な性格を持っていることを我々は知っている。その主要な目的は帝国主義者と結んだ不平等条約を廃棄し、中国の政治的、経済的独立を達成することである。これはすべての中国人にとって神聖な事業ではないだろうか。ストライキの目標は国の解放であるので、その敗北は国全体の敗北であり、その勝利は我々全体の勝利である。》

これは廖仲愷の最後の演説であった。

右派国民党員は買弁ブルジョアジーの利害を代表しており、帝国主義者の支持を得ていた。彼らは孫文が提起した、関税収入を中国の管理下に置くという要求に賛成しなかった。そしてゼネストにも公然と反対し

た。廖仲愷は彼らの前に立ち塞がった。右派国民党員は更にもう一つの会議を開き、そこで次の決議を採択した。左派勢力を壊滅し、国民党と共産党の協力関係を打ち破り、帝国主義者との交渉を始め、それによってゼネストを弾圧すること。

陰謀者達は自分達の道を邪魔している廖仲愷を、どんな事があっても無きものにしようとした。1925年8月20日、広州の惠州会館の入口の前で廖仲愷は裏切りによって殺された。

注目に値する事実：暗殺の前日の8月19日、上海の新聞の1つが廖仲愷の死を告げる電報を載せた。

何香凝が私に次のように述べた。

《この運命を決するような事件の起こる1週間前、陰謀が準備されていることがわかった。ファシスト組織のメンバーである、孫逸仙大学の学生の机の上に次の文が書かれた手紙が見つかった：是非ともこれを実行しなければならない。黒シャツ党の指導者達があなたに報酬を与えるであろう。当時、黒シャツ党の指導者たちが誰であるのか、我々には想像もつかなかった、と廖仲愷の末亡人が語った。後になって初めて、帝国主義諸国家のファシストの首領達がそのリーダーである可能性があることが我々に分かった。私が廖仲愷に、用心のために更に2人の護衛を付けるよう勧めたのはこの時であった。

これに対して廖仲愷は次のように答えた：護衛を増やしてもせいぜい暗殺者を捕えることができるだけで、彼らの目論見を止めることはできない。私は自分の命を人民に捧げている。はっきり言って、私は党、国家、人民の前で良心の呵責を感じることはない。万一、彼らが私を殺すことを決めたとしたら、予防措置は役に立たないであろう。彼らは私に恐怖を抱かせることはできない。——私は革命の大義から一步も退かない。むしろ、彼の言ったことは正しかったけれども、それでも私は何らかの手段をつけ加えることが必要だと思った。私服の護衛が廖仲愷に同行するようになった。この事は警衛軍長官呉鉄城に知られていた。しかし、呉鉄城自身が廖仲愷を暗殺する計画を準備しているグループの中に入っていることを、誰が知ることができたであろうか。

8月20日朝食の後、私は廖仲愷とともに国民党中央執行委員会定例会議に出席のため出発した。車に乗って惠州会館（当時、そこに国民党中執委があった）へ出かけたとき、我々は同志陳秋霖に出会い、一緒に中執に出かけた。会館の入口で私は我々の同志の一人の

妻に出会った。そして彼女と後で会う約束をした：半時間後に私は婦女部に立ち寄ります。重要な事であなたに相談しなければなりません。どうか私を待っていて下さい。私がこの事を言うや否や発射音が響いた。私は誰かが爆竹を鳴らしたのだと思った。しかし、振り返って見ると廖仲愷と陳秋霖が地上に横たわっていた。護衛も負傷し、倒れていた。私は助けを求め、廖仲愷をのぞきこむように身をかがめた。通常、惠州会館の入口には警官が当直をしているけれども、その時はそこには人がいなかった。廖仲愷はもはや一言も口がきけなかった。彼の上にかがみこんで、私は傷を見つけようとした。私の頭の上で再び発射音が響いた。廖仲愷を抱き上げると、彼が倒れたその場所は大きな血の海であった。血は一滴一滴彼の衣服から滴り落ちていた。廖仲愷が病院に運び込まれた時はすでに手遅れだった。明らかに、彼は途中で亡くなっていた。》

斯くて、何香凝は自分の悲しい物語を話し終った。暗殺計画の日、40人以上の雇われた暗殺者が廖仲愷を追って暗躍した。彼らは彼が通る道全体に配置され、横町に隠れていた。発射音が響くと彼らはすぐにあらゆる方向へ逃げ散った。暗殺者のうち唯一人だけが護衛に頭を傷つけられ逮捕された。彼を調べると、数枚の紙片が見つかった。そのうちの一枚は服を質入れした時の質札であり、一枚は先日付小切手だった。彼は供述の中で次のように述べた：《私は猛人（広東方言、高位の人）を暗殺する代償に数十万元受け取った。》彼に《この高位の人とは一体誰のことだ。汪精衛ではないのか》と尋ねると、暗殺者は答えた：《いいえ、高位の人とは廖仲愷、譚平山です。》

廖仲愷暗殺の主謀者の一人、林直勉は捕えられたが、彼の言葉によると、革命家を暗殺するために香港では2百万元の額の特別資金が調達された。

その後、第3軍司令官朱培徳将軍が次のように報告した。ある人々が彼の部下の将校の一人を15万元で買収しようとした。この金の代償として、革命政府を裏切って打倒するように軍を扇動することになっていた。その将校はこの裏切り行為に踏み切る決心がつかなかった。そこでこの事を全て朱培徳に報告した。扇動は失敗した。しかし、このすぐ後に廖仲愷暗殺が実行されることを一体誰が考えることができたであろうか。

葬儀に参列した人々は深い悲しみに沈んでいた。そして同時に、戦うという固い決意を表明した。《我々は反革命分子を粉砕しなければならない!》《我々は帝国

主義者と決定的に戦わなければならない!」このような訴えがこの革命家の棺の上で響いた。葬列に参加したのは労働者、農民、黄埔軍校生徒、学生、住民のあらゆる層の代表者であり、全部で20万人以上であった。広州ではこのような葬列はいまだかつて見られなかった。

第二次東征

東征を前にして

反乱軍を粉碎したことは南中国に革命の基地を創るのに役立った。しかし、革命勢力が相変わらず直面していた問題は大眾運動に立脚した国民革命軍を完全なものにするための、また北伐を実行するための根拠地を広東省内に準備することであった。

新しい軍隊は複雑な条件の下で形成された。軍隊を統一し、それを完全に政府の統制下に置こうとする企図に対して、先ず、生まれつつある国民革命軍自体の内部にある封建—軍閥の勢力が抵抗し、それを潰そうとした。

第1軍および第2軍の一部の将校達、更に軍務大臣許崇智は統一された、中央管理された国民革命軍の強化に対して偏見を持っていた。

右派分子を孤立化させる問題、そしてこれ以上革命と同調して歩むことを望まない、信頼のおけない《同伴者》をどうするかの問題が今や、特別に緊急性を持つようになった。

廖仲愷の暗殺以後、明らかに政府部内は混迷状態に陥った。暗殺直後に開かれた軍事委員会緊急会議で、汪精衛、許崇智、蒋介石から成る指導的な3人委員会が選ばれた。3人委員会の会議に M.M. Бородин とソ連へ帰った B.K. Блюхер の代わりの前任顧問（顧問団長代理）B.П. Рогачев が参加した。

3人委員会は長い時間をかけて会議を開いたけれども、何も決定することができなかった。右派と結びついていた許崇智は次のように述べた。《私は梁鴻楷が反革命的役割を果たしており、信頼できないことを感じているけれども、彼は私の古くからの友人なので非難することができない。》

まさにその時、許崇智は政府を支持していた広州軍の将軍達と手を切ろうとした。結局のところ、許崇智は少なくとも言葉の上では、革命の敵に対して断固たる行動をとるという提案に賛成した。8月25日、彼は梁鴻楷将軍を宴会に招待し、彼を逮捕した。

8月25日から26日にかけての夜、黄埔軍校の部隊が2個旅団、機関銃隊、梁鴻楷軍司令部を武装解除した。それらは広州市内やその周辺に配置されていた。同時に、その時まで廖仲愷暗殺者であることが判明していた魏邦平や他の人々を逮捕するよう、蒋介石将軍に命令された。しかし、彼らはうまく姿をくらましてしまった。それにもかかわらず、信頼できない部隊の武装解除作戦を彼が迅速に実行したことによって、当地の商人の間で蒋介石将軍の権威が急速に高くなった。翌朝彼らは店を開いた。

広州の西に配置されていた第1軍の残りの部隊を武装解除するよう、第1師団長李濟深に命令が与えられた。しかし、彼はその一部を武装解除したにすぎなかった。Xu kanging の第19旅団は鄧本殷のもとへ移動することができた。また梁鴻楷の兄弟は自分が指揮していた第1旅団から、自分のために第12師団を創った。そしてそれもまた、後の第二次東征の時鄧本殷のもとへ走った。

政府はまた廖仲愷暗殺の《思想上の指導者》である胡漢民を逮捕するよう命じた。逮捕は黄埔軍校部隊のある軍曹と2人の兵士に委ねられた。彼らは胡漢民の家へ行き、彼の娘の質問に答えた：《何の用事ですか》《我々は胡漢民を反革命者として逮捕する》《しばらくお待ち下さい。家に居るか見て来ます》と娘は言って家の中に入り、父に知らせた。彼は一瞬にして東口からうまく逃げ去った。

それでも間もなく胡漢民を捕えることができた。しかし、国民党中央執行委員達の強い要請によって、彼は有罪の判決を受けず、《彼を教育するため》外国へ送られた。

第1軍が武装解除され、また政府が強行手段をとった後、革命陣営内部の状況はやや改善された。しかし、軍事—政治状況は全般的に相変わらず緊張していた。

雲南軍と広西軍を粉碎するために、蒋介石将軍を長とする広州軍の主力が広東省の東部から移された。反乱軍に対して勝利を得た後、敗北した陳炯明の軍隊によって組織された賊徒からその地区を守るために、汕頭に残っていた許崇智は広州へ急いだ。彼は獲物の分配に与りたかった。そして《話し合いが一層容易になる》ように、司令官である彼は東部から、最も戦闘力のある広州軍第2師団を含む残りの部隊全部を引き連れて行った。

汕頭から出発する前、許崇智が考えついたことと言えば、せいぜい広東省東部における《課税権の分配に

関する条約》を最近までの敵と結ぶことぐらいしかなかった。

政府軍が広州に至るや否や、陳炯明は取り決めに破棄し、自分の軍隊を福建省から移動させ、またもや広東省東部全域をほとんど占拠してしまった。彼の軍隊の前衛部隊は五華地区にまで進出して来た。そのうえ、楊坤如は第3雲南軍が出立した後、再び惠州地区の支配者になり、陳炯明側に移った。

西部では陳炯明の同盟者鄧本殷將軍は第1軍が広州に振り向けられたのをうまく利用し、自分の部隊を三水市地区の西江のすぐ近くまで進出させた。

1925年8月、貴州省から湖南省南部を通して四川軍閥熊克武の軍隊がやって来て北江地区を占拠した。1924年秋、北伐が失敗した時、四川軍は長沙攻撃に際し程潜將軍を支援することになっていた。しかし、この約束は果たされず、我々の知る通り、程潜は宜昌への途上に敗北を喫した。広東省へ移動しながら四川軍が期待したのは反動的な総督である趙恒惕將軍が権力を握る湖南省よりもむしろ、種々の將軍達が争っている広州において、自分がより大きな役割を演ずることができるであろうということであった。

香港に突然、3隻の北洋艦隊の砲艦が現れた。これは北京政府が陳炯明將軍に派遣したもので、北京政府は彼が間もなく広州の支配者になることを期待していた。

第一次東征の最中に反乱軍を粉碎したが、その後、広州政府の立場は再び1924年の中頃と同じようになった。しかし、今や勢力のバランスは政府側に著しく優利に傾いた。

《5・30運動》の後、政府は大衆運動の中に信頼できる足場を確保した。これを促進したのは香港—広州のゼネストだけでなく、広東省の農民組合の活動もあった。農民の部隊、特に陸豊、海豊のそれは陳炯明の軍隊に大きな抵抗を示した。

鄧本殷將軍の軍隊は東へ向かって進出しようと努めているとき、武装した農民側から後方に打撃を受けた。

それに加えて、今や政府は雲南や広西の將軍達が以前持っていた収入源を手に入れていた。

軍を再編成し、信頼できない軍隊を武装解除した後、政府は6つの軍団を自由にできるようになった。

第1軍の構成：軍長蔣介石將軍、第1師団——3個連隊、兵員約3,000名；第2師団——第4連隊および第5連隊の2個大隊、兵員1,500名；第3師団（以前の第4広州師団）——兵員約3,500名；黄埔軍校士官

候補生500名。全部で8,000名の兵士と500名の候補生。

第2軍：軍長譚延闓將軍——兵員約11,000名。

第3軍：軍長朱培德將軍——兵員約4,000名。

第4軍：軍長李濟深將軍、第10、11、12師団、独立旅団、独立連隊から成る——兵員約11,000名。

第5軍：軍長李福林將軍——独立3個旅団、独立1個連隊。総勢約4~5千名。

第6軍：軍長程潜——4個連隊、兵員約2,000名。

これに加えて、呉鉄城將軍の独立第1師団約1,500名、および江西、河南、湖北軍——総計1,500~2,000名を政府は有していた。

政府はまた軍艦と河船40隻をも所有していた。

政府が絶対の自信を持って当にできたのは第1、2、3軍の諸部隊（現時点で第2、3軍はまだ弱体ではあったが）および12師団を除いた第4軍であった；李福林將軍の第5軍および第1独立広州師団は右派と左派の勢力の間で動揺している部隊とされていた。

程潜將軍の部隊、江西、江南、湖北の諸軍に対しては十分信頼がおけると思われたけれども如何せん、それほど力が無かった。

広西省でも状況は好転した。そこでは李宗仁、黃紹竑兩將軍が雲南の唐繼堯將軍の軍隊を撃退し、沈鴻英將軍の部隊を撃破し、政府と友好的関係を打ち立てた。

このような状況下で先ず根絶しなければならない主要な敵は陳炯明の軍隊である、と政府が判断したことは正しかった。第二次東征の準備が始まった。総司令官に任命されたのはまたもや許崇智將軍であった。

許崇智將軍は反乱軍粉碎の後広州軍司令官として、雲南軍と広西軍から勝ち取った特権を相続し、この市で指導的役割を果たすことができるであろうと期待して、広州へ戻った。しかし、状況は彼に都合良くはならなかった：我々が知っているように広州軍第1軍は彼の《参加》をもって武装解除された；李濟深の第4軍は彼を認めなかった；蔣介石の第1軍および黄埔軍校の権威と影響力がますます増大した。許崇智は自分の《指導的》立場を確立するために、右派分子と全面的に連合した。彼は公然と軍事委員会や国民党中央執行委員会の活動を妨害した。第二次東征の総司令官に任命され、この作戦のための資金を手にしたにもかかわらず、彼は全くの形式的な口実をもうけて政府軍の進撃を遅らせようとした。こうすることによって、陳炯明に防衛の準備をさせる可能性を与えようとした。

9月21日、政府は許崇智に直ちに広州を出て上海に

行くよう命じた。彼はなす術も無く、この決定に同意せざるを得なかった。

それと同時に、第1軍の部隊が許崇智軍を構成する広州軍第2師団および第6旅団を武装解除した。一方、彼の第4師団は《内部暴発》した：それによって許崇智將軍の支持者であった將校達が追放された。その中には師団長許済も含まれていた。この事があって後、この師団は第1軍第3師団に編成された。

10月3日、熊克武將軍が広州で逮捕された。彼の軍

を攻撃するために第2軍が進んで行ったけれども、第3軍および広西グループの支援が時を失したため、熊克武軍は武装解除を免れて湖南省に逃れた。

政府は信頼できぬ軍の武装解除作戦を内部問題と考え、軍事顧問達の参加なしでそれを計画し実行した。

このことはすべて10月15日から22日までの1週間のうちに起こった。

今や、主要な敵、陳炯明將軍の軍隊だけが残り、10月23日、それに対する第二次東征が始まった。